

第1回 郡山アーバンデザインセンター・コンペティション 「郊外の可能性 Revision of Suburbia」 テーマ座談会

日時：2009年9月26日 15:00-16:30 会場：ラボット2階ギャラリー

曾我部 昌史 (建築家、神奈川大学教授、みかんぐみ共同主宰)

本田 勝之助 (地域プロデューサー、会津食のルネッサンス代表取締役)

宗像 剛 (ラボット・プランナー代表取締役、UDCKo 理事)

コーディネーター：

前田 英寿 (東京大学非常勤講師、UDCKo 理事、柏の葉アーバンデザインセンターUDCK 副センター長)



曾我部昌史

本田勝之助

宗像剛

前田英寿

□郊外を人の目線から考え直す□

前田 それでは、第1回郡山アーバンデザインセンター・コンペティション「郊外の可能性」のテーマ座談会をはじめさせていただきます。さきほど、参加者のみなさんには現地を見ていただきました。あまり忘れないうちに、テーマについての解題として、審査員のお考えを引き出したいと思います。今回のテーマは「郊外の可能性」です。たとえば今まで国の政策等で中心市街地を、あるいは都心をどうにかしようという方法論をいろいろ今も取り組まれています。あるいは最近、農村とか限界集落とか、そういった農業をつかった村づくりや村おこしのような話があります。しかし、その間にあるこういう郊外は実際に人口も多く、たくさんの方が住んでいますし、いろんな商業が行われていて実際はすごく活発に動いている場所です。ですが、そこに対する専門的にいえば都市計画の手法や、建築デザインの取り掛かり、よりどころみたいなものが実際にはありません。

ですから今日見たような風景があるわけです。そういうところに今回のコンペが、なんらかの光をあててできればというのが、私としては一番の興味のあるところです。今日見られている、各方面で活躍されている審査員の方々に、まずこの「郊外」についてのお考えを自己紹介兼ね、コメントいただければと思います。最初に曾我部さんからお願いします。

曾我部 このコンペって難しいですね、考えてみると。なに答えていいかわからない。これは僕にとっては非常にポジティブな意味で、最初このコンペの話聞いた時に、これは面白いなと実は思いました。何答えていいのかわからないというのが、なぜ面白いのか。それが大事なところです。

僕は、みかんぐみという四人の建築家が共同主宰する建築設計事務所、それと神奈川大学での教員という大きく二つの立場で活動しています。特に神奈川大学の研究室での活動が地域との関係にかなり深く関わるとしています。今日はおそらく建築に関係している方が割と多いという前提で

続けますが、僕は、非常に大雑把な言い方をすると、近代のやり方で建築を考えるのはつまらないな、と思ったのです。産業革命以降、近代はすごく大量の問題を建築に取り込んで考えるために、問題を分かりやすく整理するやり方をいろいろと構築していきました。建物の場合だと、小学校はこういうものである。なんとなくそういう思い込みがありますよね。小学校はこういうものをつくる、住宅はこういうものであるに違いないとか。わりあいそれは都市の計画についてもそうだと思います。町並みというものは、こういうものであるという、ある種の前提のようなものがある。しかも割とそれは分かりやすく整理されている。つまり住宅について考えようと思ったときには、図書館や美術館や学校や病院のことについて考えなくていい、と。そういう整理の仕方になっていると思います。そういう整理の仕方が嫌だなと思いました。では、どういう風にするかという、その場で全く新しく、どういうふう建築を作ったらいいか、あるいはその場所を作ったらいいか、を考えたいということです。で、それを考える最大のきっかけが、地域なのです。もっと分かりやすくいうと、その場に転がっているものとか、そこで誰か、おっちゃんやおばちゃんがしゃべっている内容とか、ちょっとした記憶や思い出とか、実は結構大事なんじゃないかと思って、そういうことを一生懸命積み上げていくことで、こんなふうな建築にしようとか、こんなふうな場所をつくらうとか、っていうふうな思いに至っています。それはめちゃめちゃ面倒くさい。あらかじめ決まった方法を全部いっぺん棚にあげて、そのへんのおっちゃんが言ってることを頼りにして新しいものを考えようってことだから。なかなか大変なことですけども、そういうことを僕はやりたいと思っていて、研究室ではいろんな地方の町に行き、建築のデザインという意味では、形になるのかならないのか、意味があるのかないのか良く分かんないようなことをひたすらやっています。

いま研究室ではいろいろな場所で活動していますが、横浜のドヤ街、労働者の方々が沢山住んでいる寿町でやるのに、良

く分からないけれどまず泊ってみる。あれがなんの効果をもたらしたのか良くわからないのですが、そういうことをひたすら繰り返しながら考えるということをやりたいと思っています。

この地域の問題と、場所や建築の問題っていうのは、そういうことではないか。つまり大きく整理をして論理的にこうあると良いという、簡単に関係づけられる問題ではなくて、人間の目線で歩いていて気がつくようなそういう問題を読み解き直す、あるいは今まで結びついていなかったところを結び付け直すと、実は結構面白いということに気がつく。それが地域と建築とか空間の問題だと思っていて、最初の話に戻りますけれども、このつかみどころがなくややこしいコンペ、地域と地方都市のさらに郊外っていう、端的端みたいな表現ですが、そこで何が可能なのかを考える、こういうつかみどころのないコンペに立ち向かうというのは、まさにその近代を超えた新しさを獲得するための試みだと思うので、大変面白いなと思っていて、大変期待をしているコンペだということになります。

前田 ありがとうございます。いわゆる建築のタイプとか都市計画の決まった手法じゃなくて、そこに実際に自分が身を置いてみてやってみようという試みのお話でした。地域については、やはりいろいろと分かりにくいとか、取り組みにくいという話もありますが、決まったものを作るのではない、ゼロから考える意味では、郊外はある種面白い可能性があるということ、曾我部さんは言われたのではないかと思います、一通り済んでからご意見を伺いたいと思います。

□「郊外」の捉え方□

前田 では次に、宗像さんからお願いします。

宗像 自分がここに移り住んだ今から45年前は、僻地とまで呼ばれて何にもありませんでした。でも駅からは3キロ弱くらいで、そこが区画整理されてまちの部分ができてきました。その意味では、郊外という部分であったと思うんですが、たぶんこの並木地区の人たちは、ここを郊外とは思ってないと思うんです。ショッピングセンターができたりして、移り住んできた方々も多いのですが、まちの延長が自分たちのところまで来た、それが自分として思っている景色です。

郊外という言葉の捉え方を、どこでそのラインを引けばいいかという思いが、自分の中にはあります。自分が住んでいるまちの景色は、昭和40年ぐらいに本当に機軸がないままに、自然増殖的に生まれてきました。自分が子どもの頃過ごし、そして自分の子どもたちが学校に通った、その同じ土地で見てきた風景は、子どもと私とは違うんです。同じ自然環境のはずなのに、家が立ち並ぶことによって、吹く風の強さも変わりました。自分が子どもの頃は、非常に厳しい東北の風が吹き抜けて、田んぼの中にあるプレハブの農機具庫が飛ばされて走っているなんていう風景も記憶にあります。そこに家が建ち並んで、その中にもまだ稲穂が実る、そういう景色も混在している、それが郊外なのかと私の中では感じます。

自分はこれから50代で子どもたちが20代です。その子どもたちがいずれ郡山のこのまちに帰ってきて、その次の子どもたちが住んでいく。その中でまちに込められていく思い、その共通の理念がこの並木の1800世帯、4000人の中に何にもないままでいるのが、何なんだろうという思いがあります。

そういつている私もこの郡山を離れているときのほうが多いんですけれども、今日お集まりの皆さんや、これから応募される方々には、この私たちのまちをある距離感から見ていただき、その地方都市の郊外っていう切り口でこんな街になっていたら面白いんじゃない、そんなことをうまくお考えいただけたらと思います。そのなかで、わたくしがお伝えできることはお伝えしたい。

いまは、機軸がない郊外というか、確固たる方向性がないのかもしれない。けれどそれに対して何か街色が出来ていったらすてきだなと感じます。そういうものを持っている街は、国内にもまだ残っています。ここのなかにもなんらかの規範が少しずつ芽生えていって欲しい。というのがいまこの地域に根ざしている企業として、また住んでいる者として、そんなものを町の人たちやみなさんと考えていきたいと思っています。

前田 ありがとうございます。そうですね、確かにいま整理して、都心部、農村、郊外みたいなことに三つに分けましたけれども、実際にそこで暮らしたり、生まれて暮らす方にとっては、それがその中心部にとっての郊外という考え方は持ってないですね。自分の地域としてそこで生活されているかと思いますが、そういう発想も、もしかしたらあるのかなと思いました。

□地域の経営という視点□

前田 では最後になりましたが本田さんから。本田さんは今話されたお二人と違って、むしろソフトのいろいろな取り組みをなさっています。今回のコンペの特徴としては、ハードの提案でもいいし、ソフトの提案でもいい、それがミックスされた提案でも構わない、という意味でコンペの範囲を広げています。そのあたりの意味も含めて、お話ししていただけたらと思います。

本田 建築に携わる方も多いという部分で、みなさんの普段の目線ではない目線みたいなものが少しでも提供できればと思っています。自分の専門はもともと経営です。経営という中でも地域経営というのを専門にしています。ひとつは学校経営。福島県や文科省からの委託を受けています。学校が経営をしていかなくちやいけな。学校だけで教育の課題が解決できない。というなかで地域と家庭がもう一度協力をして子どもたちの教育を考えていかないと今の複雑な教育課題は解決できません。去年やった行事を見直してマイナーバージョンで改善していても根本的に解決しない。ビジョンを新しく作って、戦略を立てていくところから、教職員との協力、地域社会や家庭との協力から考えていく。運営というよりもレベルの高い、経営という運営手法を使っていかないと学校も難しい。というようなことで各学校をまわっています。

そのときも結局、地域と協力してかないといけな。じゃあどう協力していくか。その町に何があって、学校とどう関係を持つてという機能が求められます。この並木にも小学校があります。ちょっと外れには郡山第五中学校もあります。公園もあります。学校という視点からも、地域のひとつの役割が見えてきます。

学校以外では自治体の行政改革や、もちろん民間企業の経営にも関わったりしていますが、自分はフィールドを会津というところにおいています。世界にインターネットが張り巡らされ、これからブランド化が進んでいくときに、ますます地域の文化

の違いが求められます。ソニーもいいし、トヨタもいいけれど、会津もいいよね、といわれるような地域をマネジメントしていく。十年ぐらい前に、じゃあ会津地域からどんな商材が世界に情報発信され、物が流れたとして、可能性が高いか。やっぱり会津は農業が一番ポテンシャルが高い。そのなかでも日本食がブームでなくてトレンドになる。世界に持っていきながらやっぱり米だな、と。米のブランド化をしていながら、米はやはり日本の文化の柱なので、そこから料理や田園などにも携わっています。そんななかで、自分も毎週東京を行ったりきたりしていて、郡山は週に二度ほど通ります。東京からのお客さんを会津に連れて行こうと思ったときに、非常にいいパートナーシップというか場所だと思うのは、実はこの場所なんです。ちょうど昼ごろに郡山の駅で降りて、お迎えにあがる。その時に並木の例えばアーマ・テラスに寄らせていただく。そこでは地元の素材を使い、洗練さでいえば首都圏のサービスのレベルよりも非常に高い。その空間のゆとり、余裕というのは、首都圏の中で、坪数だ、単価だ、席数だって入れると、決して実現できない、ある意味贅沢なものがあります。でも都心の残像みたいな部分のハイセンスさは残っていて、さあいよいよこれから会津に入っていくってときの一服をつくる、期待感を高めてくれる場所になったりします。会津っていうエリアは会津若松市だけで年間 300 万人の観光者が訪れます。会津全域でいうと 600 万人です。そのおよそ三分の二の以上が郡山を経てきているんです。そういう意味では、郡山のひとつの郊外といってもこれだけインターに近いこともあり、その会津との関係性という意味合いが、私からすると非常に見えてきます。

もうひとつ郊外というのは、その働きやすさ住みやすさの共存もひとつあるんだろうと思っています。都心は働きやすい、でも住むのはどうか。一方田舎はどうか、住むのにはいいかもしれない、でも働くのにやっぱり不便だ、となる。働きやすさ、住みやすさみたいな部分が、ひとつの郊外の特徴かと思うんです。ある車の会社の CM でジャン・レノがフランスのパリあたりから車で十分か二十分行って、ここにブドウ畑があるんです、というのだったと思いますが、郊外の中にも農村が残っている。特にイギリスでは郊外におけるデザイン性が非常に高い。リージョナリー・マネージメント・システム、つまり地域を運営する最先端は実際イギリスにあるんです。それをどうやってしっかりと統合して、ある意味アーバンデザインしていくのかというと、ほんとにデザインが引っ張って行っているんです。ロンドンそのものも行政区ではなく、ある一定の人たちがロンドンでブランドをどう作っていくかを、行政管轄ではなく、ブランディングをしながらやっている街なんです。ある地域を運営していこうと思ったときに、いろいろな可能性がこの郊外というテーマにはあると思います。

前田 ありがとうございます。週に二回もこのあたりを通るといことで、確かに郡山の市内というだけでなく、もうちょっと広い、東京と例えば猪苗代とかの奥の自然地域との中間点みたいなかたちで、本田さんは考えておられるのかなと感じました。

□使う人との対話からのデザイン□

前田 さて次に二巡目として、曾我部さんは、建築なりデザ

インをされるときに、地域や場所から新しく発想して、あるいはその住んでいる人から発想して取り組みたいとおっしゃいました。一方で建築というのはある種、形を作って固定化していくプロセスでもありますよね。そういったときに新しい何かをつくるということと、建物という形をつくるということの葛藤や、どうやって新しいものを一つの形にしていくのか。建築作品の事例でも構いませんので、これからやろうとしていることのなにかヒントになるようなことをお話いただければと。

曾我部 専門の方相手の前提を崩さずに話さざるを得ないと思うんですが、つまり建築に深入りした問題の話になるかなと思うんですけども。思い込んでいることを変えていくのってというのは非常に難しいですね。それは建築でもまちづくりでも何でもそうだと思うんですけど、それは単にデザインする側が、新しいものを思い浮かべばいいということではなくて、実際には使う人間がいるわけです。体験する人や、住宅だったら住む人がいるし、商業建築だったら、それを運営する人やそこにお客さんとして来る人や、前を通りがかる人がいる。そういう人たちが今まで持っていた常識から自由になれるのかといったら、そんなことはないわけです。だから新しいというのが単に無闇に奇妙であればいいのではないと思っています。その辺の位置づけが非常に難しい一方で面白いところだと思うのは、その新しいデザインを導き出す鍵になっているのは、そこを使う人だと思うわけです。そこを使う人がどんなふうにするのか、どんなふうを考えるのか、というのをベースに新しい関係の築き方をデザインにしていこうというのがデザインの仕方だと思うんです。それは一般解的に語るのは大変難しいんですけど、個別の問題として個別の解答としてデザインを考えていくことはそんなに難しくない、いやいや難しいんだけど、なんていうんでしょう。できないことではないと思うんですが、ようするに楽しんでできることなんじゃないかなと思うんです。そこが僕たちが一生懸命建築を設計するときに、決められた方法以外のことを試みようとするところだったりするわけです。

例えば、これはちょっと特殊ですが、少し前に美術評論家の方の住宅をつくりました。このときは、話をしていると物を持って話をするけれど、ライフスタイルがなかなか見えてこない。僕は、これはおもしろい人だなと思った。大抵の人は話をしていると部屋がいくつとか、ちょっとモダンリビングなのが好きですとかいうものだけど、その人はそういうことあんまり言わない。持っているもののは話をするし、日常のときに何を見ているとか何を置きたいとか、何が近くにあるといいとか、そういうことはい。その人の家を設計するときに、結局僕らが使った方法というのは、構造体を全部本棚で作るっていうのをやったんです。どういうことかという、建物っていうのは構造体がないと支えられないから、この建物にはそこにもそこにもそこにも柱がありますよね。だからその柱を全部棚にすることにしました。つまり建物じゅうに棚がある。建物じゅうに柱がなきゃいけないから、結果として建物じゅうに棚があると、そういう家が出来た。そうすると棚に何かを置くことによって、その場所の使い方が決まります。これは何も置いてないと何も始まらないんだけど、これがすごく面白かったのは、建て方ときです。構造体を立ち上げるときのことを建て方と言いますが、このときは鉄骨造で作ったので、鉄骨の職人さんたちが来て建て方をしました。

建て方というか、見た目としては本棚が大量に地面から垂直に立ち並んでいる場所が出来るわけです。そうすると、たいてい鉄骨の職人さんたちで道具を地面にきれいに並べるんです。自分の持ち物はかばんに入れてどっか別の場所に置いてあったりする。それがね、建て方が終わって翌日行ったら、なぜか職人さんの人たちのペットボトルとか、煙草とかライターがその棚に置いてある。構造ですよ。柱の部材なんだけれど、置いてある。それは棚があるということで、そういうふうに使いはじめたわけです。それはもともと住宅でやろうとしていた、住まい手の人がいろいろなものを持って、何かをやるときにはこういうものを近くに置いておきたい、というところから発展して出てきた形式が、鉄骨の工事にやってきた人たちにも実は通じていたと、そういうことだったと思うんです。そういうことに気がつける瞬間というのがあって、それはすべての人の住宅がそうなっている必要はなくて、それはたまたまそういう住まい方をする人の家だったし、その人との対話の中でそういうことを思いついた。これが大事だと思うのです。でも住宅は簡単ですよ。その人だけ見ればいいから。

□使いたくなるようにつくる□

曾我部 今回は地域の問題を考えなくちゃいけない。これはもう、ものすごくいろんな立場の人たちがいる。より多くの人を使うものとしては以前、保育園をつくりました。熊本の田舎の町だったんですけど、市役所から保育園の需要は、将来的にだんだん下がっていくから、厚生省管轄の範囲でいうと老人福祉施設に変わるっていうのを考えておくと、半分本気半分冗談で言っていた。そこから考え始めて、ようはどんなものにも使えるようなユニバーサルな建築がいいのかなと思ったんですけど、これユニバーサルな建築って、つくってもおもしろくないですよ。単にフレキシブルなだけだから。そうではなくて、そこを運営している人たちが、いろいろと使いやすくなるようなお膳立てをしておこうと思ったのです。結果としては、木製の建具で全部が覆われていて、木製の建具のなかに棧が二本入っているんだけど、その棧が単に入っているだけではなくて、ちょっと溝が彫ってあって、ダンボールを切ったり、ベニアの薄い板を切ったりすると、そこにぽこっと嵌めるような細工がしてある。カッターを持って、寸法をきちんと測れる人であれば、カッターでしゅっと切ると、透明なガラスが目隠しになって、色が着いたパネルになったりする。木造でつくったんだけど、格子の梁になっている木造の屋根の構造体の下に六センチの深さの溝が全部あるのです。たとえばこれにライティングレールみたいなものが通っているけれど、こういったものをつけることができる。しかもつけても、溝に隠れるから格好悪くない。例えばカーテンみたいなのを画鋲でとめても、なにか新しい電線をそこに這わせても、その程度の日曜大工的にできることであれば、建物のすっきりした感じを損なわずにいろいろ変えられる。そういう、いろいろ変えたいようなつくりにした保育園をつくったことがありました。

それもでもやっぱり熊本では、わりと早い将来、子どものための施設から老人のための施設にチェンジしないといけないっていうのが見えていたりします。この辺はどっちなのか分からないんですけど、田舎と都心部とでは、保育園需要が違っ

ていて、都心だと保育園の待機児童が多くて、親のほうがみんな入れたくしょうがない。どっちかっていうと先生のほうが偉いんですが、田舎の保育園に行くと、保育園側が子どもが欲しくていっぱい入れたい。だから公立の保育園でもものすごく営業するんです。都内で子どもを保育園に預けに行くと、親がわざわざ靴脱いであがって行って着替えを交換して、全部お膳立てしてから会社に行くものなんです。田舎の保育園は靴脱がずに子どもだけほいっと渡して、着替えはこれですって渡すと先生が全部やってくれたりする。先生はそういうのに対応しながら自分で工夫していくのが習慣になっているし、そういう仕事だと思っている。そういう人たちにとっては、建築をいろいろ変えて、自分でつくり変えていこうというのが、わりとフレキシブルにスムーズに対応できる人たちによって運営されている。そういうふうな、どういう人が運営していて、どういうまちの事情があるかということも、その建築のつくり方が関係しているの、どこでもそういうやり方がいいということではないと思うんです。

前田 確かに今回まちづくりの提案ですので、今曾我部さんがおっしゃったように、たくさんの人が使えたほうがいいわけです。だからといって、色のない当たりさわりのないデザインよりも、もしかすると、一昔前によくグローバルという言葉がよく使われたんですが、地域にとにかく密着して、あるものを深く考えていくと、実はそれがグローバルに、世界中で通用する案が出てくるみたいな話と、ちょっと通じるところがあるかと思います。何かある原理的なものをその場所で発見することによって、それがいろんなところに適用できるみたいな。今までのまちづくりにはそういう視点がなかったので、すぐに公共性といって、公共施設みたいなものをハコとしてつくる。もっと個人的なところから発想してもいいんじゃないかと聞いていて思いました。

□線でつながったまち□

前田 次に宗像さんのほうで、今日参加者名簿を見たらいろんなところから皆さん来られていますので、郡山の全体像と、郡山の中におけるこの並木っていったいどういう場所なのかというところを宗像さんなりに解説していただけると。

宗像 郡山の人口は 34 万人くらいです。私たちが旧市街と呼んでいる郡山駅を中心とした部分に、昭和 40 年くらいに周辺の市町村が合併して、郡山のまちが形成されました。今の市役所の最上階に行くと、市役所が完成した昭和 42 年ごろの風景が東西南北の写真があるんです。その頃の郡山は、ほんとうに 3 キロくらいです。ちっちゃいまちだけれども、自分の記憶にある昭和 30 年代後半から 40 年代の頃の郡山には、もうちょっと歴史が線でつながっていたまちがありました。郡山に通る四号線は、僕が 50 年間生きてきたなかで三つの道があります。まず奥州街道が舗装され、それが旧国道と呼ばれました。その旧国道から 400~500m 西側に、新しい四号線ができ新国道と呼ばれました。さらにまたそのもっと西側に、この内環状線から約一キロくらい西にバイパスが通り四号線となりました。このまちにとって四号線は、東京と東北を南北につなぐ基幹道路としての役割があります。東西を見ると、東の太平洋側にいわき、西に新潟があって、その交通の要所になるのが郡山です。高速道路だと東北道と磐越自動車道という 2

つがこの郡山でジャンクションで交わり、交通が動いています。福島県のなかでの位置づけとしては、たとえばワシントンとニューヨーク、国内なら静岡と浜松と同様に、福島県には県庁所在地は福島があり、経済県都が郡山というような位置づけにあります。

昭和40年ころの中心部には、国鉄の郡山工場やJTの前身の日本専売公社などの大きな工場群があり、そこで働く人たちを中心とした活気のあるまちがありました。旧国道沿いには商店街が形成され、一步入ると花柳界や料亭街があったりとか、地方都市の中でも艶っぽさがあって、その旧国道沿いには、明治江戸末期ぐらいの古い商家も立ち並びそれなりの風情が感じられました。

それが40数年の間に、僕らのようにだんだんと中心市街地から郊外という部分に移り住んでいき、現在の中心市街地では、昼間人口と夜間人口が全く違う動きをしていて、住む場所と働く場所とが分離された状況が起きていると思います。

郡山のなかで並木というのは、駅からは三キロぐらいですが、郡山のインターからは一キロぐらいの場所で、車で来た場合に中心部に入っていき通り道でもあるので、いろんな形で東北の玄関口の役割を果たせる場所になると思います。表通りは車の動きが早い幹線道路ですが、一步入れば非常に閑静な住宅街です。かつて郡山にあった線というものが今はほとんど消えてしまっていますが、何かよりどころになるものがこの並木から改めて生まれていって欲しいと思っています。

自分ではこれまで、この並木でいくつかやってきましたが、このラボットは倉庫を改修したもので、自分が勤めていた事務所の先輩による設計です。隣のアーマ・テラスというレストランも倉庫を改修したもので、大工の後輩がやりました。内装はスウェーデンのデザイナーによるものです。

さらに、先ほど現地見学のときにも通ったうねめ通りの角の部分でも今度、倉庫を改修する予定があるんですけど、このあたりの修景は、東京芸大の益子先生を中心として外側を変えていくという動きがここ数ヶ月で出てきます。いま、そこで使う色をどうするかを考えていますが、裏磐梯でついこの間完成した四十年前の建物を再生したホテルでは、環境省の指導がとても厳しい国立公園の中で木の色が経年変化していったときにでてくる色をそこで塗ってみました。今回の倉庫のところもファサードに使う色は、この土地の木が経年変化していったときにでてくる色なのかなと思っています。その色ってなんなんだろうと考えてみると、自分が子どもの頃は、外壁が羽目板張りの家がいっぱいありました。さきほどの国鉄の工場とか専売公社とかの社宅がこの並木の周辺にいっぱいありました。その建物の色が自分の中には刻まれている基準色みたいなものだと思います。

どこのまちに行っても、そこのまちの土色であったりとか、たとえば南欧に行けば赤っぽい瓦であったりします。では自分たちが持っている色を何かひとつ探してみたいと思っています。しかしそれで全部べちゃっと同じになると東北のうら寂しい感じにもなりかねませんが、それでも何かこう拠りどころを持ちたいという気持ちが、私の中にはあります。

前田 ありがとうございます。今の、線のまちがだんだんなくなっているとおっしゃっていましたが、始まる前に少し審査員

のみなさんと一緒に、国道四号の元々の宿場町だったあたりを車で通ってくると、やっぱりなんとなく建物の建ち方とか、瓦が赤色であったりして、郡山は城下町じゃないと聞いておりますが、線というか昔の街道筋の宿場町というか、そういう交通の要所だったという面影は、たくさん残っているのかなあと感じました。ちょっとシャッターがたくさん降りていて厳しいなと感じましたけれども、なにかそういうきっかけがあれば、そういったものがまた道路のパターンとか基盤が残っておりますので、並木地区も通りというものをうまくつかえば、新しいストリートができるんじゃないかなと今日歩いて感じました。

□若者の可能性□

前田 本田さんにお伺いしたいのは、今日もかなり若い方が多く来ているんですけども、実際に会津にせよ、そういった歴史的な場所では逆に歴史があるからこそ若い人を求めているのか、あるいは完全につばねられて地元だけでやってもらえるのか。そういう若い力をどうやってまちづくりのなかで生かされるのか、あるいはビジネスの中でどう機能するかということ、話していただければと思います。

本田 会津地域のほうでも大学生にできるだけ会津に来てもらおうということを幾つかの視点でやっています。一つは、慶応大の学生を中心に「会津に来てくれ」といって、何も会津の情報を伝えず、どうすればいいというオーダーも出さず、学生自身が会津っていったらどう思うかという最初の印象から仮説を立ててもらい、こんな人いませんか、こんな場所ありませんか、と彼らが要望する人や場所に会ってもらったり、行ってもらい、とにかく彼らの要望を実現していくためのサポート役にまわるということをやったんです。十人ぐらいの学生が六回くらい会津地域に来て、その学生は「会津は忠と義の世界だ」と結構若い学生ってそういう視点を持つんだってもうそこから最初に驚きでした。人に会って話を聞いていきたいと巡っていったときに、農家さんと会いたい、ものづくりをやっている伝統職人や工芸品に会いたい。私たちがどれだけ今の学生、若い人たちが、こういうのに興味があるのかっていうのを思いっきり期待を裏切ってくれて、一番人に会いたいというかたちで人と業というのを見に行きたがったんですね。それを技として継承している伝統工芸師の方とか、農家の方なんかにはヒヤリングするんです。本田さんにいわれた手前だからとりあえず話だけはするけど、っていうんですけど、来た学生のセンスが良くて、インタビューをすればするほど、お父さんたちというかおじさんたちがだんだん熱がこもってくるんです。普段、息子に語りかけたけど語れないことを、同じ世代の若者に語れるなんていう感じだったり、こんなこと聞いてくるのかって、自分が本質として捕らえてはいるけれど人様にいってわかってもらえるもんじゃないって言って、別に観光客相手には語らなかつたような本質の議論だったりっていうのを引き出してくれるんですね。彼らに会津を一つのテーマとして、君らと同じ世代が来たいと思うような観光ツアーを作ってくれと。アウトプットとして冊子を作ってくれ、といったときの題名がリアライズという言葉だったんですね。「リアル」と「会津」をかけたんですが、私たちは東京にいて、日本ってのはこういうものがあって、日本ってのはこういう国であって、西洋化していったときにリーマンショックがう

んぬんで、ってやっぱり自分のアイデンティティをもう一度考えたいと思っていたと。ところがそれを実感できるような場が意外に東京にない。地方に来たときにそれがあつたと。リアルに目の前にいたと。農家さんと接して田んぼ仕事やってみて、伝統工芸作っている人たちの技に対しての思いの込め方みたいな、聞いてはいたし触れてはいたけれども、生で聞いて非常にリアルだったと。このリアルが自分たちに自信を与えたり、志や夢を与えたり。そんなテーマで旅を企画して、会津に連れてきたいと思うといたら、バス二台分来ました。学生が。もちろん自分たちの実費で。いや、わかんないものだなと思いました。会津にいる人たちが自分で、若者はこういうもの喜ぶだろうっていうような感じでツアーをつくったら、バス二台でこなかったと素直に思うんです。ようはよそ者、若者が来て、その土地にいたら当たり前と思うものの良さを見出してくれて、それに一生懸命、火がついていったりすると、その人が若者のように一生懸命何かをやるようになってくる。若者って結局後先考えずにだったり、熱い何かがあって、とにかくできるか出来ないか別にしてもやりたいんですっていう情熱だったり。それはやっぱり一つ若者の特権だと思うんです。いまそれは彼らとしてもものづくりを一緒にやりながら「宿る」というホームページを作って、作り手の人が思いや技をこめて作ったものっていうのは「宿りしもの」だと。物販サイトを作ったり、東京で営業してたり、イベントをして地元の人を呼んで、多くの首都圏の若い学生に知ってもらおうなんていうことをやっていたりしています。

ですから若い人なりの視点っていうのをやはり生かして、その地方のコミュニティといかに関わりながら良さを引き出して、一つのテーマを作りながらやっていると、意外に地元の人たちはそれを喜んで協力していくし、まちが盛り上がってくる。だからよそ者が入ることで、盛り上がっていく要素とか、なにか火がつきやすいものっていうのはあるんだろうなあってことを考えました。そのときにただ重要になってくるのが、拠点だろうなと思っています。ポイントの町や店っていうよりも、エリアを見てもらうように、エリアをなんとかしていこうと思うとき、やはり重要になるのは拠点だろうと思います。発達しているところでは拠点がしっかりあるんです。だから拠点をどう作っていくか。まずそこに行って、という入口がしっかりしていて、情報がしっかりまとまっていたり、このエリアの伝えたいメッセージが、一番そこで表現されていて、象徴されるような何かデザインされていたり。学生たちには君らなりの拠点はどこなかっていうのをつくったり、まちとしてもここを拠点にしていきたいっていうところをあわせていきながら、その拠点づくりをしっかりやっていると、だいぶ変わってくると思います。

話を並木のほうに移すと、このまちができて 20 年という、家族をしっかり持っておられるところも多いと思います。都市型道路型での大規模なショッピングモールが流行っているのは、家族それぞれの要望が一箇所で実現できるってことだろうと思うんです。そのときの一つのキーワードは、子どもをどうするか。ショッピングセンターで、ゲームセンターがあって、おもちゃコーナーがあると子どもそこに一人置いておける。奥さんは自分の見たい洋服を見れるし、旦那さんは自分の探したい本も探せる。というかたちで子どもがここでしっかりと楽しんでいけます。

子どもが行きたいところをどうしても親は行きたがります。この地域に住んでいる人たちや、訪れる人たちは、まず子どもです。この並木において子どもにとっての魅力はなにか。子どもはしっかりとそこで楽しんでもらえますよと答えられるか。都市型のゲームではなくて、郊外、地方さを生かしながら、ものづくりや自然に触れてみたり、都市型のセンスのいいものが置いてあったり。どうせなら子どもはそこに預けて楽しませておきたいというものをつくる。

または都市型、郊外となると車なのか歩きなのか非常に微妙な距離感だろうと思うんです。車でまわるのにはちょっと道路の中央分離帯が邪魔に思えたり、歩くとちょっと遠い感じがして、一箇所で済むようなところがいいかなと。歩きでなく、車でなく、ますますエコになると、アムステルダムもそうですが、自転車のデザインがとっても面白い。自転車がその街に馴染んでいたりします。だから大阪とか京都って、ちょっと自転車で済むような都市になっている。それが東京とは違って自転車の利用者が非常に多いんです。自転車でここまで乗ってくるか、車置いたら自転車が借りれるとか。よりエコというかグローバルなビジョンをしっかりと合わせていながらまちの特徴を出して、利用する人の一人ひとりの利用形態を丁寧に考えていくと、そのコミュニティができあがっていきやすいのかな、なんていうようなことも思っています。

前田 ありがとうございます。やはり何かをやるにせよ、慶応の学生ですか、若者がいろいろ会津のほうで動きを起こしたというご報告だったんですけど、やはり外の人が参加するためには、ある場所というか、拠点といま本田さんが言われましたが、拠点というのが必要かなと思います。私たちが実は郡山にアーバンデザインセンターを開く前に、もうちょっと奥にいった田村市っていうところがありまして、中心市街地は非常にシャッターがたくさんおいているところなんですけれども、そこに学生が、確か7、8人で調査をしたんです。三泊ぐらい泊まってかな。そのときに学生から感想を聞いたら、一番最初に出てきたのが、カフェがないと。まちを歩けと言われてたけれど、休むところがないというので、非常に不平というか、まちに対する印象を悪くしたと言っていました。その後、大学のほうで空き店舗を借りて、そこを研究拠点にして、たまり場兼こういった会議をする場所にしたんですけど、やはり地方都市、こういう郊外も含めて、自分が気軽に寄れるところ、都心であればスターバックスとかたくさんありますけれども、そういったところがないというのが、なにか活動するにしても、とっかかりがないのかなというふうに思いました。

□密度感と微地形□

前田 順番が逆になってしまいましたけれども、曾我部さんに。今日車で廻られましたよね。並木地区に限らず、郡山全体の印象というんですか、その辺りをお伺いしたいなと。普段東京、あるいは横浜のほうで活動されていますので、そういったところとの比較を含めて。

曾我部 前に4月の、桜の頃に初めて並木に来たんです。そのときは並木のこのコンペのゾーンしかほぼ見ませんでした。そのときに、今日皆さん歩いたエリアで建材関係のショールームがいっぱいあると、ちょっと特徴的な場所であるというイメージ

ジを持って帰ったわけですが、確かに建材関係、集中はしていると思うんだけど、そのとき僕は勝手に建材関係が集中していると同時に、ああいう郊外型のショールームみたいなものはこの並木地区に集中してあるんだと思ったわけです。ところが、この内環状線をずーっと行くとほぼ同じような密度感がずーっとあの阿武隈川の西側のゾーンに関しては、ほぼ同じような感じなんです。それが建材系のショールームだったものが、ちょっとした飲食店に変わってみたい、ホームセンターになってみたい、内容は変わるんだけど、まちに対しての位置づけという意味では、同じようなものがずーっと延々と続いていて、クライマックスがない。川を渡るといつの間にかフェイドアウトしていく、川をまた渡って戻ってくると復活するっていう、そういう関係になっていて、これは僕のなかで意外だったんです。中国に行くと、中国のまちってあのゾーンに行くと建材の中古品がいっぱいある街とか、あそこに行くときペットショップじゃないけど動物扱っている店がいっぱいあるとか、ゾーンごとに特徴がすごく明確にあるんです。郡山は建材集中ゾーンがあるくらいだから、きっと郡山もそうなっているんじゃないかと勝手に思っていたら、全然なくなってしまったんですね。更には文教地区的なところがどこかあるのかって雑談的に聞いてみたら、どうやらそういうのもなさそうだと。なんとなく、こうずるずるずるずるずるってなっているっていう、のが一つの印象。

もう一つは、平らだなと思ったんですね。打合せしているときの説明では、こっちに行くとき丘が広がるので、とかっていう話が出るんだけど、ほとんど車で走っている限りは、阿武隈川の東側に行ったあの丘陵の丘の上のほうに行かない限りは、こっち側はもうほぼ平ら。高低さのストレスを感じることなくいくらでも移動ができる感じがあった。でもこれは、さきほどみなさんで30分歩いたときに、これはまた勘違いであつたと思いました。人間が感じる勾配のレベルと、車が感じる勾配のレベルの、こうちょうど中間ぐらいの高低差で、この町は構成されているんだなというのが分かった。車で気がつかないぐらいだけれども、人間が歩くと結構気になる高低差がこの辺、結構ある。恐らく内環状線をずーっと行ってもそういうところあるんだと思うんですね。歩いたらきつと上がったり下がったりが気になるという。そういう高低差がちょっと面白いなという印象を持ちました。そのくらいでしょうか。

□並木地区の現在□

曾我部 あと、時間がなくなる前にぜひリクエストしておきたいことがあります。先ほどから宗像さんの話も含めて、この並木の地区を考えるコンペなんだけど、この郡山周辺とかの面的な広がりや、あるいは歴史的に昔どうだったというような関係で、わりとここを広く位置づけようとしています。これは非常に大事だと思うんだけど、一方でここでは現実にながら起きているのかっていうことも、大事だと思うんですよ。さっき僕、主に宗像さんの横を歩いていたので、なぜかコンペに答えられない僕だけが、個別の情報を得ていたりするんです。たとえば角にあるうどんやさんのところとかが、すごい頻度でお店が切り替わっているとか。あるいは、うねめ通りの角のところは先代からいろいろがんばっているけれども、街の景観がなかなかうまくいかないような状況があるとか、いろんなことを語られている。あと

は恐らく地域の人たちの特性というか、意外とイベント好きな人が多いとか話もあったじゃないですか。そういう個別の事情をせっかく今日、わざわざ来てくださっている方々なわけだから、このあと歩いていろいろ調べて帰られると思うんだけど、気がつき損ねることいっぱいあるじゃないですか。そういうことぜひお話しただいておいたほうがいいんじゃないかなと思うんですよ。

宗像 ここにいると自分ではあたりまえ過ぎて分からないことも多いのですが、少しでも変わって欲しいという想いで自分がやってきたことなどから感じ取っていただければと思います。曾我部さんのお話にあったように、ここには、脈略がないというか取り得がない。かといってそれほど風景が悪いわけでもないのです。そういう、さっき歩いて自分でもはつとしたのが、ごく少数の会ですが、青色の屋根をなくす会っていうのがあるんです。だけど、こう見るとうちのまちって青色の屋根がそんなになんないんだな、と思った。

地域の人たちとしては、並木の外郭には中高層のマンションもありますが、比較的良好な住宅街で構成されています。僕らの頃は並木には、小学校もなくて、このエリアからもうちょっと離れた小学校まで通っていましたが、いま、まちを歩いている子どもたちの動きを見ていると、まちの人たちが内環状線で分断されているんです。それぞれの交差点にはいつも町会の方々が立っています。老人会青年部みたいな、だいたい70代前半ぐらいだけまだパシリなんです、老人会のなかでも。そんな方々が中心にお母さんたちが、まちの子どもたちの安全を守ってあげています。

自然としては、逢瀬川がありますが、私が子どもの頃は本当に暴れ川でした。かつてはこの辺一帯が郡山の街の調整池的な役割も果たしていました。が、それがみんな表面排水になって流れて行くようになり、放水路の役割もしています。それから、良い公園も結構あって、非常に住みやすいまちだと思います。

ここでは、古くからこのエリアにいた人たちが核となりながら、町会の活動もまめにやっているほうだと思っています。各町会をまわってみると分かりますが、特徴的で人をひきつけて集客力のある祭とかイベントはないけれども、ちっちゃいプレハブで町内の人たちみんなが集ったりする距離感はとても大切にしていきたいなと感じています。

こうした可能性を活かしながら、この通りに面して事業をやっている勝手に思っていることですが、この通りには高い建物が本当にないので、ここを中低層で構成された「東北の代官山」にできないかなということなんです。

この内環状線も南北に走っていますが、東北の土地においては、南北に走っている道はとてありがたいんです。非常に寒いとき、太陽が動く中で東西に走る道は一日中日陰になる部分があります。それに対して、朝から夕方まで結構均一な光が東西に走るこの通りには、ずっと差し込んでくるんです。

曾我部さんと先ほど歩きながら話していたのは、内環状線とうねめ通りの交差点の両サイド、たまたま私の会社で所有している土地に、テナントとしてコナカさん、向かい側にミルキーウェイさんがあります。私が20年前帰って来たときに、父に反旗を翻していたんです。「日本中おんなじまちになるようなロードサ

イド店は来て欲しくない」って。でも父からは、「大切な店子さんに何をいうんだ」というお叱りを受けたんです。何が悪いんだという、経営的には絶対悪くないし良いことです。だけれどもせっかくそういう店が出てくるなら、ロードサイド店であっても、今後のまちのことをもっと考えた状況の中で、景色づくりをしていかないと、自分たちのまちの個性って何にもなくなっちゃうんじゃないの、っていう思いがあったんです。その時には何の規範もないわけで、そういう風な思いがどんなことを、どうしたらいいかっていっても、ただ他と同じものを作って欲しくないっていう思いがあったかもしれない。けれども自分たちのまちを考えていくときに、自分も新たなスタートを考えていかなきゃいけないってことがありました。たとえば東北の中でもこのエリアは赤瓦が多かったんです。そのまんま赤瓦が残ればいいとは思わないけれど、まちそれぞれの景色っていうのがあります。やっぱり自分たちのこの並木が、そういうそれぞれの景色を大切にしながら、内環状線のなかでもランドマーク的な位置づけの交差点になるといいなと思っています。

その通りがある程度活性化されていくなかでは、地方都市に住む人間にとってはですね、やはり打倒ヨーカドーなわけです。ああいうでっかいものが来ると、まちが変わってしまいます。このまちには、商店街とかそういうのは全然ないんですが、ぽろっと食堂とかお店が点在しています。そういうものがもっとまちの中でこれからも一回脚光を浴びて、ここで暮らし、そこで仕事をする人たちが、その活力を持続していけることって何なんだろう。地元として皆さんからそういうアイディアを頂きたいと思っています。

本田さんとは、自分の企業のことでは、いろいろ話をしています。今日もご覧になられたように、内環状線沿いには田んぼとか畑があるので、「あれ貯蔵庫にしよう」とか。その貯蔵庫から食材をまわりの食堂に提供していったら、このエリアおもしろくなるんじゃないとか話しています。そんなふうはこのエリアが、まちのライフサイクルが落ちることなく地域経済が回りながらも、決して派手なことじゃなくてもいつも自分たちがわくわくどきどき楽しくやっけて、よそから訪れる方々もあたたかく迎えられる、人が集うまちであって欲しいと思います。

住むなら並木、ちょっと遊びに行くのも並木、そんないろんな意味で地方都市並木のこんな住まい方っていうのが、ひいては日本の一つの地方都市の原風景になって、これからの時代の動きになっていく、そんなイメージが勝手にですが、自分のなかでは燃え上がるものがあるのです。47 都道府県があって、たぶん市でも 800 くらいあります。その 800 分の 1 の郡山ってどうあればいいのか。その個性化の部分が生き残っていけるかどうかだと思います。自分たちの個性が発揮できて、地元ではきちんとコミュニケーションのとれる生活基盤があり、だけれど多くの方が訪れていただくことに対してウェルカムなまちでありたい、そんな想いです。

前田 ありがとうございます。前半に 4000 人の方が住んでいて、1600 世帯、町会の活動が意外と活発だというお話があったんですけど、たとえば通りに面した、うどんやさんに限らないんですけど、そういう企業市民っていうんですか、そういう方々の活動ってどうですかね。ネットワークというか、普通の駅前商店街があれば、商工振興会みたいなものがあるんです

けれども、この並木ではいかがでしょう。

宗像 内環状線とクロスしているうねめ通りには、一応、西部商店街という名前のついた商工会があるんですね。それは、ヨーカドーさんのところをベースにして、8 月の頭にうねめ祭りというのがあるんです。そのときのイベントのひとつとして 49 号線の西側の道からオープンカーでパレードをしたりとか、そんな仕掛けはしております。だけど内環状線には、そういう動きはないんですよ。僕もまだ具体的な行動には起こしてないけれど、先ほどのように遊説する部分とかはあります。うちのはす向いのイナックスの支店長や、信用金庫さんと話をしたりとか、部分的に話をしています。アーバンデザインセンターのほうの動きが出てきた段階で、我々この内環状線で仕事している企業としてなんらかの形で魅力作りをしていこう、そういう風を吹かせていきたいっていう思いがあります。コナカにも話していて、その後ろのパチンコ屋さんの開発の方ともちょっとお話は始まっています。

僕はやっぱり自分が建設業なので、あんまりその部分を強く出しちゃいけない、って思いが正直あります。だから自分の動きはしていくけれど、そのなかで皆さんと歩調を合わせるものも見つけながらいくことが必要だと思っています。

その街色の見つけ方をこれから模索していく上で、みなさんと協議しながら進むスタートを今、切れるときがきたのかなと。それが郡山アーバンデザインセンターが今年の 11 月に立ち上がったから、下準備をしてきた一年かなという感じです。

前田 ありがとうございます。

□外部資本と地域の関わり□

前田 本田さんにちょっとお伺いしたいんですけど、さっき曾我部さんの環状線の感想で、建材メーカーに限らず、いわゆるその全国チェーンみたいな中規模ぐらいのものがぼんぼんぼんとずっと並んでいると。そういったところっていうのは、土地を別に持っているわけじゃなくて、たまたま交通の便が良くて、その土地を借りて商売をやっている。企業本体はもっと他のところにある、みたいなタイプが多いと思うんですね。そういう風にややその地場を、基盤を持たない商工業者たちっていうのが、結構、郊外の幹線道路沿いというのはあると思うんですね。そういった人たちがまちづくりや地域の活動に参加するっていう、うまい事例というか、仕組みのなんかきっかけみたいなものがあるんでしょうか。

本田 会津でも二十年前は田んぼだったところに幹線道路が通ったときに、ここ二十年で郊外店という地元からいうと外の外資の会社が入ってくる。外から入ってくるので、そのまちについてどうしていいかっていう議論になかなか出てこれないし、地域も期待してこなかった。なのでエリア全体をどうしていいかっていう統合性って、やっぱりない。そういうところが非常に多い中で、今回の「郊外の可能性」って、いまおっしゃったポイント、すごく大事だと思っています。

会津のほうでもスローフードなんて一時わっと出ましたけれど、そのときに声をかけたのが、会津にある大きめの外資の工場です。たとえば会津であれば富士通城下町と呼ばれてきた富士通があって、大変な半導体産業があり、あとは外資の三菱製鋼っていうところがあったりとか。会津のなかに住んでいる人

たちがたくさんそこで働いているんだけど、会津に資本として本社があるわけじゃない。その人たちに会津のこういう食の活動をしようと思うんですが、っていって声をかけると、「いや、それを待ってました」っておっしゃるところが多いんですね。意外に地元の人が声をかけてみると、そのお店の人やそのお店を管轄する東京本部の方にしてもいいんですが、地元といかに融合してなんぼなんです。逆に働いている人はここに生活している人なんだけれども、資本が地元資本ではないからやっぱり分断された空間で自分が働いている孤独感っていうのはずっとあった。だから消費という形で地域振興のお手伝いはできるかもしれないけれど、事業の主体者としてお手伝いしたいと思っていただけどきっかけがなかった。ていうところが意外に多いんですよ。そのきっかけ作りをどうやってあげるかなあということを非常に思っています。

□第一次産業からの地域コミュニティ再生□

本田 宗像さんからもお話ありましたけれど、ここにも田んぼ畑あるんですよ。いま友だちが六本木の徒歩0分のところに六本木農園っていうレストランを作ったんです。その六本木農園で壁主なんてやりながら、お客さんと仲いいお客さんは自分で壁塗った分、壁塗った人は会員制みたいな形でちょっと得点があったりして、みんなで一緒に店作りをやっていこうかしています。その隣に十台分くらいの駐車場が、森ビルさん所有であるんですね。それを彼、果敢にずっと森ビルさんに話をしている、この隣の駐車場を農園にしてもいいですか、六本木に農園があるってあって、駐車場利用して収益あがるより、そこ畑にしちゃって森ビルさんの社会貢献ってやったほうが効果大きくないですかって。それで、およそ森ビルさん呑む感じなんですね。いわゆるあれだけの高い土地のところさえも、畑にしてしまうくらい、結構いま、第一次産業に人が集まってくると思っているんです。それは郊外にとってもそうだと思います。第一次産業って今までビジネス的に軽視されたので、経営の視点からすると経営の成熟度が、最も低い業界が第一次産業なんですね。その次が学校だったりするんですけど、今、急速にあらゆる産業から農業を含め第一次産業が入ってきているので、おそらく成熟度は早く進むだろうなと。そのときに農業はどう進化していくか。たぶんアートと一番出会っていくこと、アート、デザイン、エンターテインメント、と農業っていうものを一緒に考えていく人たちがこれから今後、増えるだろうなと。

もう一つは特に都心部、いわゆる都市生活をやっている人たちが、だんだん昔とか、原点とか、自然を欲しがっている方が非常に多い。だいぶ生活が離れすぎちゃったんだろうなと思うんですね。昔大事だったってことを、何か違う憧れを求めていくことで犠牲になってしまった何かとかですね。あとは便利だ便利だっていいながらも、昔の良さを忘れてった何かに気づきはじめたとかですね。そういう今の都市生活者っていうのは、昔とか原点っていうものにだんだん回帰してきている。で、それはやっぱり郊外っていうのも、都市生活を便利にしているかのようで、自然のまっただなかにあるわけではない。その人たちは生活に自然を取り入れたいという思いはあると思うので、郊外にいる他の資本の人も、第一次産業をきっかけに

共有していく、畑をシェアしていくのもおかしな話だと思うんですよ。この辺に住んでいる人たちが今晚の野菜を買いに行こうってあって、たとえば大型ショッピングモールに行くわけです。実はそこに並んでいた茄子やトウモロコシは通り過ぎた畑の農家さんが納めてるものだったりするかもしれない。それってなんか自然じゃないなと思っていて、目の前に作っている方がいて、それを買えるきっかけがあるんだとしたら、そこで買えた方が自然なのにか。私もお米をやっている銀座九兵衛旧米さんに納めてるんですけど、「おいしいお米ってどういうお米ですか」って必ず聞かれるんですね。そうしたときに答えるのは、「自分が作ったお米が一番おいしいんですよ」って答える。自分で作りたがっていてもいるんですよ。一番安心なお米っていうのは、自分が作ってたり、自分のよく知ってる、信頼できるひとが作っていたりっていう、コミュニティのなかに第一次産業があるのが最も安全な食だと思っています。そういう場所がやっぱり目の前にあるわけですから、都市型の郊外店舗みたいな飲食店も目の前の食の、農産物を使っていますっていうのは、その周辺の人たちからしたら最も安心な農作物だったりすると思いますし、そういうのをきっかけにつながりが生まれてくるだけでも一緒に共同コミュニティみたいな意識ははぐまれていくと思います。

前田 ありがとうございます。いろいろ決まりきった社会システムが当然と思ってやっているわけですが、ちょっと発想を転換してみるともっと効率的であったり健康的なやり方があるんじゃないか、というお話だったと思います。

□ワクワクする楽しい視点□

前田 それでは大体一時間半くらい済みました。最後に審査員の方々、一言ずつコンペに期待することみたいなことをいただきたいと思いますと思うんですが、もしその前に会場から、コンペのやり方とか、今の意見交換のなかで質問や意見があるという方はぜひいただきたいと思います。もちろん事務的な質問でも構いません。何かありますでしょうか。

会場 事務的な質問で大丈夫ですか？

前田 大丈夫ですよもちろん。

会場 一時審査で出すものと二次審査で出すものっていうのは、基本的には違うものと考えていいのでしょうか。ここで二ヶ月ぐらいあいているのは、一時審査で出したものから、そのものをA1で出して提出しろっていう話ではないんだと思うんですが。

事務局 基本的には一次と二次は違うものを出していただきたいと考えていまして、その二ヶ月っていうところにも、もう少しさらに調査していただくとか、提案を練っていただくとかいうことで考えております。

会場 概要版的な発想でもいいのでしょうか。

事務局 そうですね、やはりA3という大きさで割りと限られていると思いますので、概要版という形になるかと思えます。

前田 他に何か？いいですか？あ、一番後ろの方。

会場 今日は専門の硬いお話を聞かせてもらって大変勉強になりました。私は介護のほうの仕事をしておりまして、セミナーに行ったりしますと認知症、認知症、認知症で、今日はぜひ建築関係で専門的なということで全く違うセミナーというか

先生方のお話を聞くことができ、すごくフレッシュできたかなと思っています。違う方の話をたまに聞くのはいいなあ実感いたしました。今回、建築関係ではないんで、デザインとか難しいことは分かりませんが、一番、自分が雰囲気があったら楽しいんじゃないかな、とか、あるいはワクワクするんじゃないかなという視点でまちをとらえて考えれば、いろいろ出てるのかなと思いました。今日は大変、タダでいい話を聞かせていただいて、いい一日でした。

前田 どうもありがとうございます。タダというか、ぜひ案を出していただけると、思っておりますので、どうぞよろしく願います。他に何か……。こういった場がまちづくりの最初の起点としては結構重要なのかなと思っています。何か他にありますでしょうか。いいですか？ 学生さんも何人かみえてるようですけど大丈夫でしょうか。

□持続していくためのシステム□

前田 では最後にお三方からコンペに期待すること。こんな案が出てきたら当選しますよ、とは言わなくていいので、こういうのがおもしろいんじゃないかといったことを最後に一言ずつお願いいたします。じゃあ、宗像さんから。

宗像 今回、このコンペに至るまでに、全体でお話した機会ってなかったですね。断片的にこんなことがあったら楽しいねとか、これまでの経験からくる「部分」の話ばかりだったんですね。そういう「部分」がデザインされていくこともあります。今日、みなさん歩いてきた内環状線っていう通りでの、システムやソフト、考え方が出てきて、それらが持続されていくということは、デザインされた「部分」だけじゃないと思うんですよ。それに対してどんなことが動き出せば、そこが活性化されか、活力が生まれるか、そんな視点が大切なのかなって感じます。それとそれを支えるまち、この 4000 人のこともやっぱり頭に入れていただきたいですね。

最近、仕事柄、この並木エリアよりもっと郊外の部分でもいろいろ仕事しているので、クラインガルテンができないかと話もあります。ドイツと言えば、週末の農業住宅もあるけれど、自分はシュトゥットガルトから 10 キロくらいのところにホームステイしたことがあるんです。そのワンユニットがだいたい 40 世帯くらいでした。そこに共通のパン焼き釜があったんです。月に何回か焼いていて、ちょうど僕が行った日にもそれやってくれました。みんなでパン生地を持ち寄ってね、そこでみんなでパンを焼いて交換したりとかしていました。

これはまちの中で考えたものですが、たとえばそんなシステムがここにもできてきて、自分たちが住む、生活してきたこととは違った刺激があることで、並木で何かが動き出し、それが今度、起爆剤になって地方都市が元気になってゆくスタート地点になればと思うんです。

だけど、どうしてもまちの情景ということから始めてしまう部分が多と思うんですが、それを動かすソフトやシステムみたいなものをぜひご提案いただければと思います。

□並木ならではの楽しい解答□

曽我部 建築のアイデアコンペみたいなものだ、割ときれいなドローイングで、最近良く見る解決方法のバリエーション、

みたいなそういうのがすごく多いんですよ。そういうのを見るとだんだん腹立ってきたりもする(笑)。今回はそういうことはやめましょうね。この並木のまちに対して何ができるのか。さっき会場から最後にコメントして下さった方のおっしゃった、ほんとにそうだと思うんだけど、うきうきするようなワクワクするようなまちにするための、ちょっとした関係の築き方を見つけてくれるといいなと思うんですよ。それはね、別に窓の開き方がかっこいいとかそういうことは全然関係ないと思うから、そういうのにとらわれずに、このまちにとって、しかもそれが鳥の目的にまちはこうあるべきだっていう、全体の一般解のようなことで答えるのではなくて、並木のまちはこういうふうだっていうのに気づいたからこうなんじゃないとか。並木のまちにこんな場所があったからこういうのどう？ っていうような。このまちならでは、楽しい解答であって欲しいなと思っています。で、その上で、ドローイングやぱりきれいなほうがうれしい(笑)。その上できれいなドローイングで提案してもらえると更にいいなと思います。楽しみにしています。

□ありきたりでなく本質を深掘する□

本田 私もいろいろビジネスにまわったときに発想、アイデアっていうのを、プロの人は考えるのは違うなあと考えるきっかけが、その秋元康さんだったんです。一年くらいずっと仕事をご一緒させてもらったときに、彼の発想を一つ聞いたんですね。こういうテーマが与えられて説明が加えられて、まずホワイトボードで自分だったらこう考えるっていうのを全部書いてみてください。秋元康さんがこうヒットを考えていく仕組みをいろいろ書くわけですね、ホワイトボードに全部書いて、それ全部一度、大きくバツテンにしましょうと。そこから発想はスタートするんだって、いうんですね。だいたいみんな考えるようなことって、ここに住まれている方も考えられてたりするんだらうなあ。そこをたぶん期待しているんじゃない。そういう意味で、考えることを書いて一度否定しないんですね、これだこれだって、そこでこれでいこうって一度思って、その思い入れがどんどん強くなればなるほど、それにしばられてしまって別の発想が出にくくなっちゃうんですよ。だから目の前に書いて一度バツテンにすることって、とっても大事だなと思いました。秋元さんに学んでみて。

ちょうど一昨日北山孝雄さんの勉強会で一緒したのが、博報堂デザインっていう会社の長野さんって方でした。イエモンのブランドもそうですし、資生堂さんとか日本郵政のブランディングをやった方です。その方も確かにそうだなとっていたのは、やっぱり形のデザインをする前に、しっかりと考え方のデザインをしましょうということ。考え方のデザインっていうのは、この商品はいったい誰をターゲットにしている、何を訴求していくのかっていうところなんです。

並木っている部分は、当然まちではあるんですが、まちってイコール人が住んで生活しているところですから、その生活している人たちにとってということからデザインされてしまっても、たぶん長続きしない。

特に本質ですよ、本質の部分を考え抜いて、「郊外の可能性」っていうことの本質みたいなものを、このコンペをきっかけにつくる。グローバルに対してでもテーマが訴えられるものは、

本質深堀できればできるほど、おそらくそれは共通したいろいろなテーマにつながっていく部分だとも思います。

そういう意味で、並木っていうひとつのこのまちならではの特徴であったり、郊外っていうところの本質みたいところを、生活の視点から深堀していく。そのときに必要となってくるものは何なのか。本質深堀していかないと、祭りで終わっちゃいます。そんなのもあったねで終わっちゃうんですね。ちゃんと深堀されてるものほど長く続いていくんだろうと思います。とはいえ、この20年でこのまちが出来上がったってことですから、プラス10年でいったら、大きく変えることもできるんだっていう可能性も考えたいですね。「こりゃ、無理かなあ」と、「どっちみちなかなか動かせないかなあ」とかではなく。たぶんそんなことは心配のない、実力がある方がこのUDCKoにいらっしやと思うので、「これはできないかもしれない」という制限をつけずに、思い切った提案を出して下さったほうが、いざこのまちに住んで、なんとかしようと思っている人たちのモチベーションみたいなのも奮い起こすんじゃないかと思います。そういった通常の発想では出てこない、ありきたりではない、そうはいいいながらも本質を深めていきながら、こんなのできたら面白いね、っていうようなものを期待したいなあとと思っています。

前田 ありがとうございます。どうでしょうか、ヒントになるようなことはありましたでしょうか。これで今回のパネルディスカッションといいますか、座談会は閉じたいと思います。つたない司会でしたが、ありがとうございました。

(終了)



<会場の様子>